

イラン（イラン イスラム共和国）

旧国名ペルシャのイランは、ペルシャ語で「アーリア人の国」の意味を持つ。ペルシャ湾に面しイラク、トルコ、アフガニスタン、パキスタンなどに囲まれた世界を代表する産油国である。1979年、イスラム革命（イラン革命）によって2,500年を越す王制に終止符を打ち、イスラム共和国となった。国民の大半はイスラム教徒で、その91%がシーア派^(*)である。国旗は緑、白、赤の三色旗で、「神は偉大なり」のスローガンが入っている。

国土のほとんどがイラン高原で、首都のテヘランの海拔高度は1,100mを越える。年間降水量は219.2mmで、冬に集中し、夏はほとんど降らない「沙漠と高原の国」である。国民の大多数はアーリア系のイラン人であるが、クルド人のほか多くの少数民族も住んでいる。公用語はペルシャ語だが、英語がかなり普及している。暦は私たちが用いている太陽暦ではなく、西暦622年を紀元とする太陰暦のイスラム暦を用いている。1年が354日で、季節と月が一致しない。休日はイスラム教の休日である金曜日である。

農業、遊牧と絨毯生産が伝統的な産業であったが、1908年に南西部で石油が発見されてから国の産業構造が一変した。53年以降、数次の経済開発計画を経て工業化が進められてきたが、イスラム革命による急速なイスラム化やイランイラク戦争（80～88）などがブレーキとなった。

（*）シーア派とスンニ派の違い

マホメット（ムハンマド）の死後、誰がイスラム教徒指導していくのかで2つの派に分かれた。ムハンマドの血筋の流れを重視したのがシーア派で、血筋に関わらずマホメットの現行を正しく理解し、受け継いだ人とするのがスンニ派

<ペルシャ料理>

イラン イラク戦争中にイスタンブールからイランにバスで向かった。フランス人の若者と自分を除くと全員イラン人だった。国境で長々と待たされた。どういう訳かスイカの持ち込みがままならずで、みんなに振舞われるハプニングまであった。

イランに入って車道沿いの食堂でイランの国民食、チェロケバーブを食べた。ピラフの上にケバブがのり、その上に生卵の黄身がのっていた。フランス人は生卵に即拒否反応を示した。フランスに限らずほとんどの外国では生卵を食べる習慣がない。その大きな理由が鮮度の問題である。もう一つは、生のまま丸呑みする蛇を連想することから嫌われているらしい。

3泊4日のバスであれこれイランのことを語ってくれた若者が、宿を探す前に家で食事をと誘ってくれた。3カ月ぶりの帰国だということで、両親並びにお姉さんから熱烈な歓迎で迎えられていた。

居間に通された時、青を基調にした植物文様の絨毯の美しさに思わず声を出してしまった。母親とお姉さんはチャドル姿で、真紅色のザクロシロップをはじめ、大皿に盛られたリンゴ、ブドウ、サクランボ、グミなどの果物、メインは骨付き鶏肉、レーズン入りでスパイスの利いたパラオ、焼き飯の一種でソーセージとサラダが添えられていた。絨毯の上に敷かれたビニールシートの上に並んだ。正座をして構えたら、親父さんから胡坐の方が楽だと勧められた。別室の女性陣は片膝を立てた姿勢で食べていた。

<石油>

イランは世界有数の石油資源保有国である。2020年原油確認埋蔵量はベネズエラ、サウジアラビア、カナダに次いで4位、生産量は5位である。中東で最初に油田が発見されたのがイランで1908年だった。開発に当たっていたのがイギリスのアングロ イラニアン石油会社（AIOC）で、イラン皇帝や貴族を説き伏せて石油の利益を独占していた。

50年、サウジアラビアで石油開発が始まると、アメリカのアラムコ石油会社がサウド国王とその利益を折半する契約を結んだ。これに刺激を受けたイランでもAIOC利益独占に対して石油の国有化を要求する民族的な要求が強まった。聖職者を含む民族主義の指示を受け資源ナショナリズム運動を進め、51年に石油国有化を断行した。イギリスは国際裁判所に手続きしたが棄却され、イランの石油国有化は成功した。その後、アメリカが動いてクーデターが起き、王制が復活する。国有化した石油は国際石油資本、メジャーズの合併会社が管理することとなった。

石油国有化の動きは再び動き出す。エジプトのナセルによるスエズ運河国有化で、中東諸国自立の先鞭をつけた歴史的な出来事であった。独裁的な王制でアメリカべったりのイランだったが、ホメイニらを中心とするイラン イスラム革命（79年）で挫折した石油国有化が実現した。

<油断大敵ならぬ油断絶命>

原油は熱せられ、沸点の低いものから順にナフサ（粗製ガソリン）、ガソリン、灯油、軽油、重油などに分けられる。何がどれほどになるかは、原油の質に左右されるがほぼ一定しており、ガソリン12%、ナフサ12%、灯油10%、軽油7%、ジェット燃料1%、重油49%、その他9%となっている。これらはLPガス、火力発電やストーブなどの熱源とし40%、ガソリン、軽油、重油やジェット燃料などの動力源に40%、プラスチック、ペットボトル、ビニール袋や化学繊維のロープや衣料品などの原料として20%の割合で利用されている。その結果、私たちの生活は哺乳ビンから乳母車、文房具や生活用品の数々、車のタイヤからスポーツ用品、街を彩るファッション、更には野菜や果物栽培の温室の熱源更には食品を入れるビニール袋まで石油漬けの生活を送っている。私たちの生活の隅々まで支えている石油だが、産油地域の戦争や革命で72年と79年の石油危機、更には2011年の東日本大震災で石油供給が滞った。あの当時の世界の、国内の混乱ぶり、更には経済活動に与えた打撃は後々まで続き、石油の重要性を思い知らされた。

<イラン ジャパン石油化学とイラン イラク戦争>

日本とイランの石油で忘れられないのが「イラン ジャパン石油化学」（IJPC）の大事業の破綻である。日本のエネルギー資源確保を目指して1973年に設立した。78年には工場の85%まで完成したが、79年のイスラム革命、80年に始まったイラン イラク戦争が激しさを増し、IJPC 工事現場まで爆撃を受けた。さらに、イラクのフセイン大統領は1985/3/17、イラン領空は戦争空域で無差別に攻撃すると宣言し、イラン在留外国人は48時間内の脱出を宣告した。

ヨーロッパの国々は比較的近距離であるからすぐに飛来できた。最も遠距離の国が日本と韓国だったが、韓国政府は即座に大韓航空の派遣を決めた。唯一取り残されたのが日本人215人だった。勿論、日本政府も日本航空（当時、全日空は国内便のみ）に派遣を依頼したが、飛ばす機会を失ってしまう。イランの日本人が絶望の淵に沈んでいた時、トルコのオザル首相、後の大統領がトルコ航

空の派遣を決断し、特別機への志願者を募ったところ、その場に居合わせたパイロット全員が手を挙げたという。3/19、20:30のタイムリミットが迫るなか、空襲警報の鳴り止まないテヘランのメヘラバード空港に2機のトルコ航空機が着陸した。給油を終え飛び立ったのは19:30だった。無事イランの国境を超えた時、機長が「ようこそトルコへ！」と機内アナウンスしたことが知られている。この飛行機に乗れなかった500人のトルコ人は車でイランを脱出したという。救援機が日本人優先したことにトルコでは何の非難も出なかったという。後日、駐日トルコ大使は「エルトゥール号の借りを返すだけです」と短いコメントをだした。

こうして、7,300億円をつぎ込んでいた工事は、81年に打ち切れ、その後、残務整理などに8年近くの歳月を要した。

【資料】1985年3月21日 朝日新聞 決断が遅れた救援機 — イラン脱出

「決断が遅れた救援機 イラン脱出現地と協議手間取る」という検証記事が朝日新聞に載った。これによれば、外務省の初動は意外に素早く、在留邦人の疎開や一部外国人の出国の動きが始まった15日（日本時間、以下同じ）の時点で、日航にチャーター機の派遣を検討をしていた。これを受けて日航は、B747による運航計画を固め、乗員を指名するなど準備に入った。そして、イラクが設定した安全飛行期限までに救出を終えるために、19日午前1:45までに成田を出発するスケジュールを設定、準備時間も考慮し、18日夕方を外務省の正式要請のリミットとしていたという。ところが、外務省は、現地が救援機を必要としているかの意向確認を優先したため判断がもたつき、日航の設定したリミットまでの正式要請を出すことは出来ず、派遣は流れてしまったのだと言う。この記事を読む限り、救援機を派遣できなかったのは、外務省の判断がもたついたためだった。というのが真相のようだ。同時に、トルコが救援機を派遣に応じてくれるような外交上の信頼関係を日頃から築いていることの大切さを教えてくれた事件でもあった。

<日本人は何故戻ってこないのか?> 遊牧民と稲作農耕民族の違い?!

イランを旅したのは1982年で、イラン イラク戦争（80~88）中だった。ペルセポリスで監視人からチャイをご馳走になった。とりとめのない話の後、「シャー（王）の時代には沢山の日本人が来たが、ホメイニ師になってから来なくなくなったのは何故だ？」の質問があった。革命直後の政情不安、対イラク戦争中であることを語ったが、どうしても解ってもらえなかった。イラン人の言い分は、革命は既に終わった、ここペルセポリスは戦争が治まっており、シャーの時代と変わりないという。

また、シラズで同宿だったイラン人のメッヘラン氏からは「JPCはイラク軍の爆撃で工事はストップし、イラン人も日本人も避難した。今は爆撃がないのでイラン人は戻って生活しているが日本人は戻ってこない」と不満を口にしていた。どうも異民族が入り乱れたイランの歴史と民族性と、島国の農耕稲作民族の違いを思い知らされた。

<イスファハン> 「世界の半分」

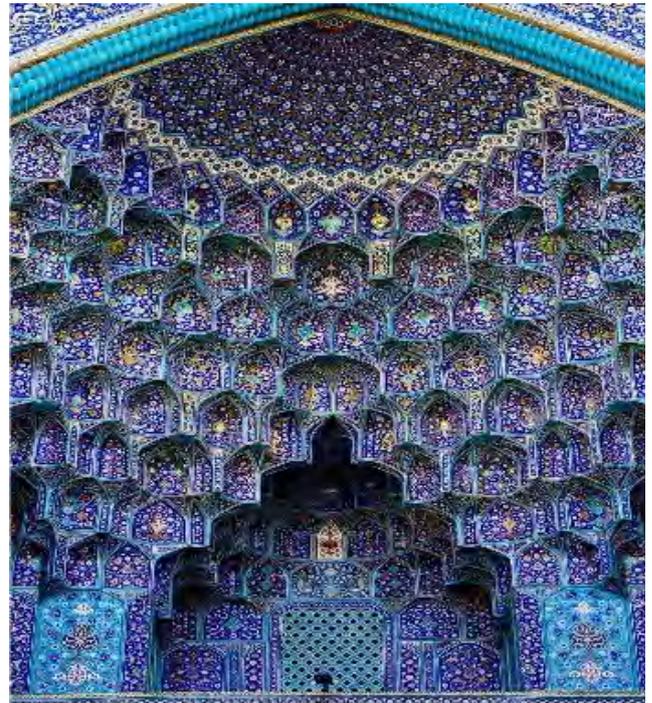
標高1,500mのオアシス、イスファハンの朝は清々しかった。メダン シャー、王の広場（革命後はイマーム広場）を前にした時、沙漠という単調な色彩の世界に居ることを完全に忘れていた。広場中央にある泉水、目に沁みる芝生の緑と色とりどりの草花、威厳溢れるシャー モスクの青、優

しい丸味を引き立てるクリーム色のシェイク ルトフッラー モスクのドーム、そして広場を取り囲むバザールの日干し煉瓦の色である。更には、まばゆい陽光を照り返す白色と暗い影に染まる日蔭が、これらの色彩をより鮮明にしていた。

吸込まれるようにシャー モスクに向かった。入口に立って見上げると、びっしりとアラベスク文様が施された蜂の巣と鍾乳石を組み合わせたように複雑に入り組んでいた。重厚な木製の扉の間を通過して中に入った。大きなアーチを抜けると静かに、燦然と輝くシャー モスクがあった。天井、柱、壁は青を基調としたタイルで埋め尽くされ、深閑とした空気に身体の中まで洗われていく感じだった。青一色はイスラム教徒の夢見るパラダイスを表わしているのだろうか。中央ドームは音響効果を考えた設計で、真下の石を強く踏むと、木霊が7回聞こえてくる。ドーム内部はコーラン、唐草そして幾何学文様で埋め尽くされていた。



シャー モスク



シャー モスク門の飾り

- シャー モスクのイワーン（門） 青を基調とする精密なアラベスク文様のモスクや宮殿に囲まれたイマーム広場は「ここに世界の半分がある」といわれた
- シャー モスクのイワーン内部 イワーンの天井は複雑で精密な装飾が施されており、イスラム建築の傑作と言われている

アーチと列柱が巧みに反復しており、歩を進めてもドームの下にいる。そして、透き窓と内庭から仕込む光は図柄をより煌びやかに映し出し、幻想的な一つの世界を創り出していた。限りない広がりの中に一つの点から無限への広がりにも見えてくる。無限の反復によって創り出された美しさが、見る人を圧倒し、いつの間にか幻想の世界へと導く感じだ。

屋下がり、性懲りもなくまたメダン シャーに向かった。広場中央の泉水は子供たちの遊び場と化していた。周囲の木蔭では飲食を楽しむ家族、泉水をバックにポーズをとる家族と広場は開放感に溢れていた。この情景からは、革命、戦争と混迷を続けるイランの姿は見えてこない。外界とは隔絶された異次元の世界であった。

子どもたちの遊びになっている泉水を挟んでシェイク ルトフッラー モスクと対峙するアリカブ

宮殿に入った。係員から勧められるまま狭い螺旋状の階段を上って最上階まで一気に来てしまった。全ての部屋は繊細な細密画で飾られていた。天井部は蜂の巣型にくりぬかれ「カチカリ」という石膏の浮彫だった。かつて王の広場への門であったと聞いた。後に、宮殿に造り替えられたと言うが、アリカブとは「高き櫓」を意味するとトルコ語だと言う。二階の「タラームのテラス」に出て納得した。格子の天井を支える木柱は、沙漠の風と暑さに耐えてきた美しさを秘めていた。

テラスからの眺めは圧巻だった。威厳に満ちたドームのシャー・モスク、正面には洗練された美しさのシェイク・ルトフラー・モスク、広場を取り巻く回廊風のバザールに囲まれた広場は、一つの世界を表現していた。「世界の半分」と謳われる理由の一つは、壮麗なモスク建築物もさることながら、広場の解放感、バザールの庶民性、長い歴史に支えられた文化、そしてそれらを継続、発展のための教育などの一般民衆の旺盛な生活が存在して初めて与えられたものだろう。

イラン人が誇らしげに口にする「世界の半分」、「病を得て訪れる者までも癒える」と言われる都、イスファハンの基礎は、1598年サファヴィー朝に始まる。アッバーサー世がこの地に都を移し、ベルサイユの庭園が造られる一世紀も前に左右対称の大通り、チャハルバグが造られるという壮大な都市計画の結果生まれた。その中心が今見下ろしている王の広場で、南北500m余、東西160mの広さである。タラームのテラスからの眺めは飽きることはない。そして、ここにいる限り意識することはないが、ここは紛れもなくオアシスである。

<コーランに見るパラダイス>

「イランの真珠」と例えられるイスファハンから南へ480km、シラズへはバスで移動した。赤褐色の礫と岩だけで単調な眺めが続いた。途中、車道に沿って小さな噴火口のような、大きな蟻地獄のような穴が直線状に並んでいるのが見えた。イラン独特の地下水路の手入れの跡だ。直径1mほどの穴の周りには、小石や泥でこんもりとした高みとなり、かなりの距離に渡って続いていた。荒涼とした掘みどころのない沙漠に、手仕事の結晶が綿々と続いていることが不思議でならない。沙漠では命あるものを支えるのは水である。となれば、この信じがたい労働の賜物であるカナートも頷ける。

先年、シリアの旅で見かけた沙漠の民、ベトヴィンがコップ一杯の水で口を漱ぎ、指で顔に水を弾き洗顔し、手を洗っていたのを思い出す。この地の住民には、庄内地方の年間降水量2,000mmを越え、田植えの終えた水田は水に覆われる風景はどのように映るのだろうか。コーランに述べられているパラダイスは「せんせんとして泉が湧きだし、香しい風が黄金の木の葉を揺らすところ」とある。

<カナート>

イラン高原の大部分は沙漠や半沙漠で、人工的に水を引かない限り農業は成り立たない。北部のエルブールズ山脈は5,600mを越え年中冰雪に覆われている。これらの山々から雪解け水が山麓にむかう河川を潤している。

貴重な水がカラカラに干上がった地上を流れると蒸発してしまう。これ防ぎ、砂嵐などから守る

ために掘られたのが地下水路、「カナート」である。高山地帯で沁み込んだ伏流水を集落まで地下水道で導くカナートは、出口付近には緑豊かな耕地や果樹園が広がり、集落が発達する。イランの農村の半分以上がこの種の村落と言われている。カナートはイランはじめアフガニスタン、シリア、イラク、中国北西部（坎兒井-クアンチソ）、エジプト（フォガラ）などでも見られる。



カナート、地下水路から掘り出した土砂の小山

<コーランと酒>

イスラム圏での酒は、豚肉と共にご法度であることは広く知られている。なかでも、革命後のイランはサウジアラビアと共に最も厳格な禁酒を励行している。コーランには賭博行為を非難する言葉と一緒に「その両者は大罪と、多少の益もある。だが、その罪は、益よりも大である」(2章 219)と述べられている。酒を表すアラビア語は「ハムル」で、物を隠す意味で、人間の知性を狂わすものだという。アラーの前で人間は尊厳を忘れて動物的になることを戒めている。また、酒とは、ブドウを原料としたものを指すのが普通だが、ナツメヤシの実、大麦、小麦、蜂蜜などから醸造さえる液体の全ての広い意味にとらえている。ましてやアヘンやヘロインは言うに及ばず、ハッシッシなどはもっての外ということになる。純粋に宗教的な意味の外に、沙漠という過酷な自然でのアルコールは身体に好ましいものではないだろうから、現実味を帯びている。

ところで、コーランには禁酒のことばかりがある訳ではない。「ナツメヤシやブドウの果実から強い飲み物や食べ物を作ることができる。これはコーランを理解しうる人々へのアラーのしるし」(16章 67)とある。

更に、禁酒が原則のイランが生んだ国民的詩人の作品に李白顔負けの酒、酒宴を讃えるものが少なくない。これまでの若者との語りの中でも、シャーの時代には飲めたと懐かしむ声があった。「酒は百薬の長」、「憂きことを忘れる天の雫」などなど、人間の酒に対する欲望が強いだけに、これまでにかかなり紆余曲折があったことを示しているのかもしれない。街を歩いていて、かつて美しい酒ビンが並んでいた店頭にはレモン、イチゴ、ザクロなどのジュースやシロップのビンに変わっていた。

<シラズ> バラと詩とワインの街

イスファハンから 480 km、バスで7時間の旅だった。途中、春にはバラの海に沈むという古都、シラズへの期待とイラクとの交戦地接近の不安が交差した。岩山を抜け、下り坂にかかるとパット視界が開けた。車道を跨ぐ「コーランの門」越しに緩やかな窪地にシラズの街が横たわっていた。翌朝、礼拝を呼び掛けるアザーンで目を覚ました。赤茶けた山々に囲まれたシラズの歴史は、紀元前 1,100 年頃、アーリア人のファールス、またはパールス族がこの地に移住してきたのに始まるという。これらが訛って「ペルシャ」の語源になったとされている。シラズはペルシャの臍であり、ペルシャ民族の発祥の地ともいえる。その後、アラブ人の支配、繁栄、反乱による破壊、再興と長い歴史のある街で、「バラと詩とワインの街」として広く国民に親しまれるようになったという。

テヘランの若者は「テヘラン男に、シラズ女」と言われているほどシラズの女性は評判が良いと語ってくれた。周囲の山々の裾野は一面ブドウ畑で、秋には甘い香りが漂うとも言われている。バラと詩とワインを讃えた国民的詩人、ハーフェズとサーディーの住み付いた街となれば期待は膨らむばかりである。



ハーフェズ廟（*）

ペルセポリスへの行き方を求めてのんびりと観光案内所に向かった。途中、イラン航空事務所があり、人々が群れていた。この光景からすると飛行機の混雑ぶりが読み取れた。また、一夜明けただけなのに帰りの足の確保が気になった。予定を変更して男の匂いが充満する中に入り、押し合いへし合いしながら入口まで進んだ。入り口には大男が座り、事務所への入場制限をしていた。1時間程待つようやく順番が回ってきた。ペルセポリスの次に予定していたマッシュアットのフライトがないことを知り断念した。そして、航空券は三日前まで発売ということで、テヘラン行きのチケットを購入することなく事務所を後にした。気を取り直して、案内所に向かった。大きな建物で、10名ほどのスタッフが忙しそうに対応していた。ペルセポリスへのツアーも、直通バスもないことを告げられた。当てにしていたペルセポリス前の公営のダリウスホテルは閉鎖中だという。更に、詩人たちの作品に登場するバラで飾られた天国の庭、エラムガーデンも革命後閉ざされたままだという。また、17世紀にフランス人が称賛したというワインも、革命後はご法度で店頭から消えたという。新生イランはまだまだ混乱の真ただ中であつた。

夕方、サーディー廟に向かった。花で飾られた一角は、周囲の岩山とは対照的だった。モザイクタイルから成る八角形の墓には、彼自身の詩が刻まれていた。門限が迫っているというのに出入りする人の波が絶えなかった。シラズには、ここの廟に限らず、近くのハーフェズ廟をはじめ壮麗な詩人たちの廟が残っている。イラン人の詩、特にペルシャ古典詩は、フランス人の料理、イギリス人のティー、アメリカ人のフットボールをも凌ぐという。その表れが美しい廟であり、テヘランのフェルドウシー通りであり、サーディー通りである。



イランの敵 ソ連、アメリカ、イスラエル、イラク 壁画

また小学校の教科書にも古典詩があり、暗記させられると聞いた。そして、これらが日常生活、精神形成にも大きく影響しているのか、会話の中に比喩的表現が見られ、「アラブのフランス語」といわれているペルシャ語の美しさ、滑らかさの原因となっているとのことだった。

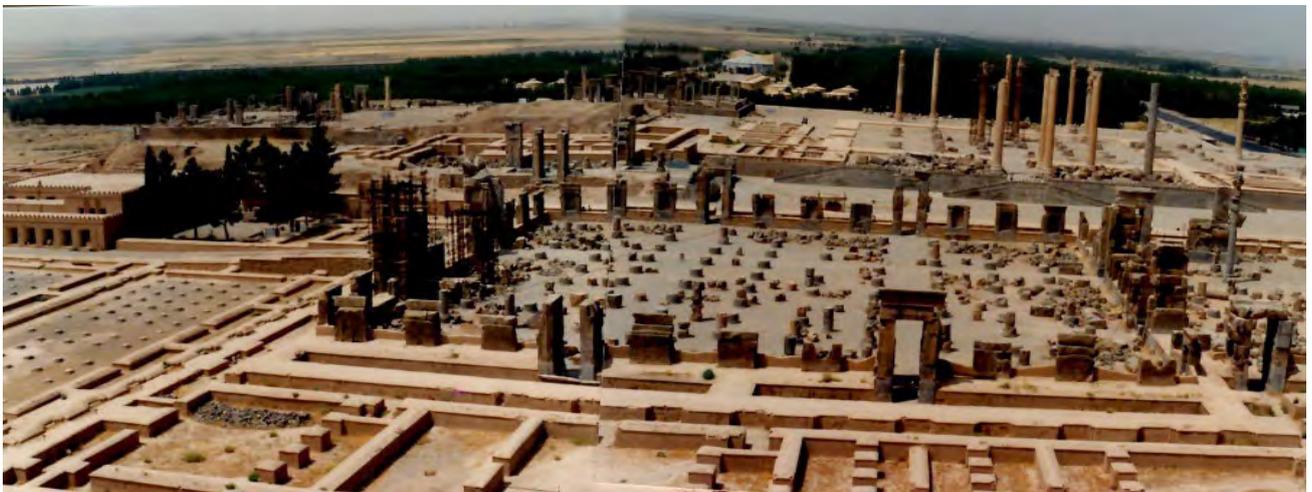
サーディー廟に来ている人々の大部分は、家族連れ旅行者だった。ちらほらと兵士の姿見えた。聞けば900 km以上離れたテヘランから休暇を利用して来たという。今、イランはイラクと戦争中で

ある。しかも、戦火を交えているところは隣の州と言っても良いのに、全くその気配が感じられない。兵士や宿のボーイに尋ねても「あー、やってるよ！」の返事が返ってきた。

(*) ハーフエズ廟 シラズは叙情詩人サーディーとハーフエズが生まれ、住んだ街。イラン人は子どものころから彼らの詩を愛し、尊敬しており、シラズの象徴となっている。夕方にもかかわらず人の波がたえることがなかった

<ペルセポリス>

1971年、ペルシャ建国 2,500年祭が行われた。その舞台はイラン紀元元年とされているアケメネス朝最初の首都だったパスルガダイではなく、ペルセポリスであった。ペルシャ帝国の力が、西はエジプトから、東はインド国境まで達した時の宮殿跡である。岩山の斜面をならし、高いテラスを築き、その上に宮殿があった。平野を見下ろす長さ 450m、幅 300m という広大な規模に圧



ペルセポリス遺跡全景：放火により廃墟となった 中央部の柱の基盤の所が「百柱の間」

倒されてしまう。どうも、人間は大きいイコール権力の巨大さという単純さをもつ動物のようだ。標高 1,800m とはいっても沙漠の真夏の太陽は焼け付くように熱い。宮殿への第一歩は、この暑さを吹き飛ばすかのように建つ人面有翼獣身の巨像であった。高さ 10m 余りだろうか。宮殿を守護するクセルクセス門である。見学コースは、アバダーナ、謁見の間へと続く。この基壇の石組に支配下の国々の使節が列をなして貢物を捧げる浮彫があった。ペルシャ人の衛兵、子ヤギを運ぶメディア人、ラクダを引くエジプト人、壺や皿や腕輪を持つシリア人、覆面で顔を隠すガンダーラ人などなど、民族により服装、貢物に特徴が見える。そのところどころに一角獣の背に食らいついたライオンの浮彫があった。このライオンこそがペルシャ帝国の力を誇示しているものであろう。



アバダーナは、高さ 2.6m、長さ 110m、幅 90m に 36 本の列柱に支えられた木造の屋根があった。そして、ダリウス 1 世の碑文から杉はレバノン、象牙はエチオピア、黄金はバクトリア(*) から運び、石膏はイオニア人とサルディア人、加治工はメディア人、レンガ工はバビロン人と、支配下の全領域から資材と技術者を駆り集めたことが

知られている。当時、まさに一大国際見本市の観を呈していたのだろう。最も豪華な部屋は百柱の間であったとされている。今は只整然と丸い基石が残るだけであった。真昼の陽光で煮えたぎった空気は、時折竜巻を伴い、気ままに吹き抜けていった。

この帝国は、遊牧民から起こった。後にオアシス基盤とする国家に切り替え、交易路を整備し、軍隊と共に商業に重点を置いた。なかでも、101のキャバンサライ、隊商宿を持ち、2500 kmに及び「王の道」が知られている。帝国最盛期の王、ダリウスの統治能力の中に、今日のイラン文化の特徴である国際性を見る思いがする。この帝国も紀元前300年頃、ギリシャから攻め込んできたアレキサンダーによって滅ばされる。勝利の酒に酔う彼は、舞姫タイスにそそのかされ、宮殿に火を放った。三日三晩燃え続けた後、灰土に埋もれたとされている。

しかし、遺跡の規模といい、おびただしい石の彫刻といい、アケネメス朝ペルシャの権勢を十分に今に伝える遺跡であった。世界各地の文化が融合し、より洗練された文化に発展した後、ササン朝ペルシャ時代にゆっくりと世界各方面に流れ出した。東方の乾いた路をたどった「文化」は、シルクロートのオアシスを經由して今の中国へ、そして日本の正倉院へと長いながい旅を続けた。文化



は水と同様高いところから低い方へと移動する。そして、新たな文化を受け入れ同化する柔軟性と寛容さと包容力を有する文化が、シルクロードに存在していた。

(*) バクトリア 中央アジア、現在のアフガニスタン北部のアムダリア川流域

<コインネックレス>

外国で買いものをして、金額を聞き取れなくとも書いてもらえば何とかなる。これがイスラム圏、アラビア語圏の国だと書いてもらっても見慣れない数字で面食らってしまう。すぐに解るのは1



と9位である。2と3は頭を傾けると何とか読める。ところが5、6、7、8は見慣れない記号に見える。



イランの通貨はリアル (rial)、補助単位はディナール (dinar)、1リアル=100ディナールである。5ディナールの硬貨は逆さハートに見えることからネックレスにしている人も見かけた。

<嫉妬深いイスラムのジン（精霊）>

イスラム圏では他人の物を誉めない方が良いと言われている。軽い気持ちで「素敵な腕時計ですね！」の言葉が、「その腕時計が欲しいな！」になってしまうからだという。多くのイスラム教徒は妖精、幽霊、悪魔などの総称「ジン」、超自然的な精霊の存在を信じている。千夜一夜物語に出てくる「アラジンと魔法のランプ」に出てくるランプの精もその一つと言える。他人に褒められたり、羨ましがられたりすると、それに気付いたジンが嫉妬し奪いに来るか、事故や失敗などの不幸をもたらすとされている。ジンの嫉妬で不幸になる前に褒めた相手に差し上げるのだという。

勿論、褒められた時の対処法、ジンから身を守る方法もある。それはイスラム圏に伝わる「ハムサ」、トルコでは「ナザールポンジュウ」



という大きな目のお守りであり、マホメットの娘ファティマの手だという。神のご加護を表わしおり、ネックレスや指輪、あるいはドア、入口に飾ることでジンの悪行を防ぐことができという。

<機内に入ると、チャドル姿が消えた!!>

テヘランからイスタンブール行きチケットを購入した時、フライト4時間前に空港に行くように言われた。チェックインカウンターでも、出国手続きでもチャドル姿は前へ前へと進んでいく。残った男どもは押し合いへし合いだった。

イラン人の荷物検査は見ていなくても気の毒なくらい徹底していた。見送り人に絨毯を返す人、化粧クリームには2度3度とガラス棒を刺しこんでいた。空港で働く女性はコートにスカーフ姿、イラン人の女性乗客は当然チャドル姿だった。ところが、機内に入った途端、黒いチャドル姿は一瞬で消えた。チャドルは自分の意志というより社会の強要に思えた。経済的に混乱の続くイランで外国に出られる人は一握りであり、パーレビ時代にはいち早くチャドルを止めた人達に違いない。

イスタンブール空港の雰囲気は、イスラム教の国の中では開放的だ。チャドルを脱ぎ捨てた女性たちは半袖、ノースリーブ姿でハイヒールの音を響かせて空港出口へ急いでいた。

シリア (シリア アラブ共和国)

シリアの国名の由来ははっきりしない。アッシリアの短縮形、山脈を意味するシュリンなどが考えられるが、アラビア語の「北の国」を表すスリアが有力視されている。

シリアは、1946年のフランスの植民地支配から独立し、宗教に基づかない国造りが行われてきた。しかし、40年以上にわたって軍や治安部隊、秘密警察による監視や抑圧を強いるアサドーによる独裁政治が続き、市民の不満が積もりつもっていた。こうしたなかチュニジアの民衆蜂起から始まり、2011年にアラブ諸国に広まった民主化と自由を求める運動、「アラブの春」で、エ

ジプトではムバラク政権が倒れ、リビアでは強大な権力をふるっていた独裁者カダフィ大佐が倒された。イエメンではサーレフ大統領が次期大統領選挙には出馬しないと表明した。

アサド父子による独裁政権が続くシリアにも飛び火し、民衆が蜂起したが大統領は軍隊を投入して鎮圧した。これに対して、反体制派が反発しアサド政権不支持で民主的な政権交代を支持する国々の支援もあり、シリアは内戦状態になってしまった。この混乱に乗じてイスラム主義による国家を目論む組織イスラム国、IS が台頭してきた。その結果、シリアはロシア、中国、イランが支援する現政権のアサド支持勢力、アメリカなど西側諸国が支援するアサド政権不支持勢力、さらに IS も加わって三つ巴の内戦に発展してしまっただ。人口約 2,100 万人の半数以上が国内外への避難を余儀なくされ、27 万とも 47 万とも推計される人びとが命を落とし、「21 世紀最大の人道危機」状態に陥った。

シリアは西アジアの地中海東岸に位置し、北にトルコ、東にイラク、南にヨルダン、西にレバノン、南西にイスラエルと国境を接している。首都はダマスカスで古くから都市として栄え、東西交通の要衝となっている。住民の大部分はイスラム教徒で、アラビア語を話すアラブ人である。地形と気候は変化に富んでおり、地中海沿岸地域は温暖な気候に恵まれて柑橘類や野菜栽培が盛んである。南東部には沙漠が広がり、国土面積の 40%以上に達する。海岸と沙漠の間は、内陸平原地域で重要な穀倉地帯を形成していた。国策として食料自給率を上げるために大掛かりな政府主導の灌漑事業を行い、繊維製品、果物、野菜、綿花、タバコなどの輸出できる農作物と農業従事者を増やしてきたが、紛争以来大打撃を被っている。

<ダマスカス>

ダマスカスは「千夜一夜物語」に往時の繁栄ぶりが描かれている。エデンの園のモデルであったといわれている。地名そのものにもエキゾチックな響きを感じる。オアシスに源とし、シリア沙漠に消えるバラダ川に潤されている街で、紀元前 2000 年頃から地中海、アラビア半島などを結ぶ交易の中継点として栄えてきた。4000 年の歳月が流れた現在も、三つ巴の内戦までは繁栄し続けていた世界最古の都市のひとつであった。そして、過去の占領者ごとに街が増築されたため、現在の都市の 8 フィート、約 2.5m 地下に埋まっているダマスカスのすべての遺構を発掘するのは不可能だという。

ダマスカスのスーク ハミディエもまた世界最古のスークといわれている。城壁に囲まれた旧市街が近づくと匂いがスークへと導いてくれる。鉄骨の黒い屋根で覆われた大きなドームが入口で、吸い込まれていく人の波、吐き出されてくる人の波に圧倒される。幅 7~8m の通路は、トルコ帽のオヤジさん、黒いベール姿の太ったおばさん、独特な服装の遊牧民のベドウィン、赤千鳥格子を頭に巻き付けた若者、だぶだぶの白長衣の兄さんなどなどで溢れている。通路の左右には間口 2~4 m ほどの店が軒を並べ、通路にまで商品が溢れている。その数 3,000 件だという。



世界最古のウマイヤ モスク

スークを覆う黒いドーム状の屋根が尽きたところからローマ時代の石柱が立ち並び、大理石の古城を彷彿させるウマイヤ モスクがあった。8世紀ウマイヤ朝時代に10年の歳月をかけて建てられた縦150m、横100mの巨大なもので、完全な姿で現存する世界最古のモスクだという。シリア国内のみならず、世界各国のイスラム教徒達が巡礼にやってくる聖地のひとつとされている。回廊に囲まれた前庭は横たわる人、眠る人、語り合う人達をやさしく包み込んでいた。

世界最古の街、ダマスカスの大通りには大木が茂り、左右の歩道と車道の間は、濃い木蔭の公園になっていた。また、バラダ川に架かる橋には涼を楽しむための広場があった。ダマスカスは今もアラビアンナイトの雰囲気になれる不思議と心地好い街であった。

<スークでの買物>

スークでアラバスク調の刺繍入りのテーブルクロスと象嵌細工の物入れが気に入った。手に取ってみると値札が付いていた。売り手は「高い！安くしてくれ」という買い手の言葉を待っている。いうなれば値札は交渉材料である。売買とは、売り手は少しでも高く売ろうとするし、買い手はその逆である。その駆け引きこそが商いの原則で、アラブ圏、インド圏、チベット圏、アフリカや中米などに今でも残っている。従って、何かを買う時は値切らなければならないのである。その第一歩が「高い！」の声で始まる。大きな声で、驚きの表情を込めて、しかも真剣でなければならない。双方とも自分の主張で相手を納得させた時、あるいは納得しあった時に初めて値段が決まるのである。

もし、値札どおりで買い物をしたら

どうだろう。勿論、買い手は損をする。でも、それだけでは済まされないものがある。商いの原則である駆け引きをしないということは、商いというものを軽蔑していることにならないだろうか。商いは時間をかけ、自分の納得できる値段に落ち着いた時こそ、その商品の価値が決まるのである。だからこそ、あくまでも真剣に、真面目に、たっぴりと時間をかけるのがアラブ圏での買物である。但し、これは商品を前にして売り手と買い手が対峙した時の話である。これが個人や小さな作業現場で彫刻、装飾、刺繍、手織りなど腰を据えて見ていると、熟練した技に驚き、天職とばかりに没頭している姿が美しく見えてくる。ここでは、値段交渉の意気込みは萎えてしまう。



世界最古のスーク ハミディエの典型的な店舗

目には、たっぴりと時間をかけるのがアラブ圏での買物である。但し、これは商品を前にして売り手と買い手が対峙した時の話である。これが個人や小さな作業現場で彫刻、装飾、刺繍、手織りなど腰を据えて見ていると、熟練した技に驚き、天職とばかりに没頭している姿が美しく見えてくる。ここでは、値段交渉の意気込みは萎えてしまう。

<シリアの食べ物と飲みもの>

アラブ料理に含まれるシリア料理は、ごった煮系が多い気がする。香辛料を多用したシチュー料理が主流を占めていた。千夜一夜物語にバラのエッセンスやジャコウ入りの菓子や飲み物が出

てくる土地柄だけに、世界的に見ても香辛料多用地帯といえる。

好んで食べたのが「バーミヤン」でオクラと羊肉を煮込んだもの、干しブドウと香辛料を加えた米をブドウの葉で包み煮込む「ドルマデス」。それにピタと呼ばれるパンが主食だった。小麦粉に水、塩、砂糖、イーストを加えて、一時間ほど発酵させ、高温のオーブンで一気に焼上げる。中が空洞のポケット状になっており、野菜や肉、豆類などの具材を挟みいれサンドイッチにして食べる。ピタの歴史は古く数千年にわたって中東の主食の一つで、現在も食べられている。なお、イタリアおピザの起源とも言われる。

シリアのコーヒーはアラブコーヒーといわれるもので完全に粉に挽かれ、ふわふわしている。

これにカルダモンで香りづけされているのが特徴だ。ジャズヴェ(*)に水とコーヒーの粉を入れ、中火にかけてコーヒーが沈んだらそっとかき混ぜる。泡がたち始めたら吹きこぼれないように何度か火から離しながら泡がいっぱいになるまで熱する。これをカップに注ぎ、上澄だけを飲む。コーヒーより一般的なのがチャイ、紅茶である。ポットで淹れるのではなく、鍋で煮出したのを、砂糖 1/3 程入ったカップに注ぎ、かき混ぜることなく上澄だけをちびりちびりと飲んでいく。



(*) ジャズヴェ トルコ式コーヒーを淹れる器具。銅や真鍮できており、柄の付いたひしゃく型をしている

<パルミラ>

「沙漠の花嫁」と言われるローマ時代の美しい都市遺跡があるパルミラはダマスカスから北へ 167 km のホムスへ、さらに東に向かって沙漠の中を 158 km、バスで 5 時間、シリア沙漠の中にあるオアシス集落である。



茶褐色の山地を回り込むとナツメヤシの緑に包まれたパルミラの町、続いてセピア色のアーチ型記念門、列柱道路が突然現れる。紀元前1世紀頃からシルクロードの隊商都市として栄え、当時の最高の技術が用いられたという神殿や列柱道路からもその栄華が伺える。パルミラの素晴らしさは、ギリシャ、メソポタミア、ローマ、そして地元の文化が豊かに混ざりあった独特の様式にあると専門家は語る。

パルミラでもっとも有名な人物といえば女王ゼノビアである。ローマ帝国から一時的にエジプト、シリア、パレスチナといった東部の属州を奪い取り、パルミナ帝国（269～273年）に組み入れた。その後、ローマから独立しようとしたが反撃されて捕らえられてしまう。ゼノビアはローマに連行される途中病に倒れたとも、自決したとも、捕虜ながらも黄金の鎖で引かれローマの凱旋に加わったとも、ローマ郊外の別荘で貴婦人としての余生を送ったともいわれている。



ゼノビア亡き後のパルミラは、再び世界史に登場することはなかった。そして、喜望峯経由でインド航路が開かれると、隊商路は急速に衰退していく。栄華を極めたパルミラも他の隊商都市同様に沙漠から飲み込まれてしまう。アラブ人の中では、「パルミラは、ソロモンのジン（沙漠の精霊）に命じて、一夜にして造らせた都の跡」と言い伝えられているという。

パルミラの遺跡は、街外れに広がる遺跡群でいつでも好きなときに遺跡内を歩き回れる。地元の人たちは、遺跡内をバイクで走り抜けていたし、投宿したホテルは遺跡の中にあった。

左：ゼノビア女王（ダマスカス博物館にて）

【資料】パルミラの現状

2014年にアサド政権に対する反政府勢力として急成長した「イスラム国」（IS）は、2015年5

月、シリア中部のパルミラを制圧した。シリア文化省のアブドゥルカリーム遺跡・博物館局長によると、同省はISがパルミラ侵攻後、イスラム教の霊廟と国内有数の歴史的価値がある2世紀のライオン像（高さ3.5m）を破壊したことを確認しているという。シリア当局はISが歴史的遺産を破壊するのは、偶像崇拜禁止などの信仰心だけでなく貴金属の密売による資金獲得が目的であるとしており、遺跡の博物館の多くの収蔵品はISの制圧前にダマスカスに移したという。ISは8月中旬には元遺跡管理責任者で考古学者のハレド＝アサド氏を殺害、そしてついに23日には世界遺産の一部で最も保存状態のよかったパールシャミン神殿を爆破したと複数の通信社が伝えている。

<朝日新聞 2015年8月18日、8月24日の記事による>

<遺跡は夕日で目を覚まし、朝日で眠りにつく>

シルクロードを行き交う商人たちは、隊商都市パルミラが夕日でバラ色に染まる景色を見て「バラの街」と呼んだという。パルミラで泊まったホテルは遺跡の中だった。夕日に染まり、人影のなくなった列柱道路をゆっくりと歩いた。耳を傾けると、吹き抜ける夜風は遺跡の精霊たちの動き回る微かな音を運んできた。遺跡自体も様々な言葉で囁き始めた。人影の絶えた夕べからは、遺跡の時間が支配する不思議な感覚だった。

数年後、朝の陽光に浴するモアイ像を求めて暗闇の中車を走らせた。空の明るみで浮かんできたモアイ像、逆光で見る黒いモアイ像は躍動していた。しかし、程なく白日の下に晒されたモアイ像は動かぬ石像と化したのを見て、観光客が集まる頃には深い眠りにつくことを悟った。

＜イスラム教徒の娯楽＞ ― 夜の語らい

パルミラで3泊お世話になったホテルのパーティオ、中庭に置かれたテーブルは、折れた遺跡の列柱の一部だった。夜、ホテルオーナーの家族が集まってくる。農業技術者として地元で農業を営む長男、レバノンで学んだ歯科医の三男、地元小学校で教鞭をとる叔父さん、それに宿泊客の博物館勤務のドイツ人、大使館勤務のアメリカ人、日本人も加わった。長男が畑から採ってきたブドウを食べ、チャイを飲みながらの楽しいひと時だ。水タバコを吸う人、パルミラのことを尋ねる人、外国人への質問などなど、みんな様々だが、語らいの場に溶け込んでいる。

沙漠の夜を吹き抜ける風は心地良い。沙漠の民が昔から身につけている娯楽なのだろう。夜明け前、4時頃には朝の礼拝が待っている。0時を過ぎているが語らいはまだまだ続く。これでは暑い日中の昼寝は理に適った、必要不可欠なものであることが理解できる。

パレスチナ問題 ― 愛国心も度を越すと道徳的不感症になる

アラブ諸国とイスラエルは、ことあるごとに敵対する。これをバイブルの時代まで遡ることはあまり必要なさそうな気がする。そもそもこの問題が激化したのは第一次世界大戦中のイギリス中東政策であるし、より複雑にしたのがアメリカであったからだ。

この地域は7世紀以来アラブ化されて、16世紀以後はオスマントルコの支配下にあった。第一次世界大戦でイギリスは、敵国オスマントルコに対してアラブの反乱を組織する必要から北緯37度以南、今日のトルコとシリア国境にアラブ人の国家をつくる約束を1915年にアラブ側とした。いわゆる「マクマホン書簡」である。また、アラブの反乱とはイギリスに対するアラブの協力で、かの有名なアラビアのロレンスが暴れまわったのはこの時である。同時に、ユダヤ人に対しては、反ドイツ活動を含む大戦協力の代償としてパレスチナにユダヤ人のナショナルホームをつくることに同意した「バルフォア宣言」を1917年にしていたのである。さらにその裏ではフランスと分割統治する約束の「サイクス ピコ協定」まで1916年に結んでいたのである。このイギリスの三枚舌外交の大任を果たしたのが、当時の植民地相ウィンストン チャーチルで、後のノーベル文学賞の才能を巧みに働かせていたのだろう。これではアラブ民族もユダヤ民族も怒るのは当たり前である。イギリスは第二次世界大戦後、この地を放棄してしまった。国連ではパレスチナをアラブとユダヤの両地域に分割するという中途半端な決議を採択したが、アラブ側は当然拒否した。一方、ユダヤ側は1948年、「イスラエル建国」を宣言してしまう。

その後の度重なる中東戦争は、背後に大国の思惑が働き、この問題をさらに複雑にしてしまった。いうなれば、ヨーロッパでもてあましたユダヤ人問題の解決を、アラブの犠牲の上に押しつけてきたともいえる。このパレスチナ問題を解決するため和平交渉、キャンプデービッドで開いた。呼び掛けたのがアメリカのカーター大統領、呼び掛けられたのがエジプトのサダト大統領とイスラエルのペギン首相であった。パレスチナ問題解決のための交渉にパレスチナの代表であるPLOのアラファト議長姿がないのは何故だろうか。そういえば、イスラエルを国連で承認する

時も、パレスチナ代表の姿はなかった。このような大国中心の政治から抜け出せないところに、世界の混迷の原因がありそうな気がする。

<コマンド> - ハマにて

パルミラからハマに戻った時はすっかり暗くなっていた。遅い夕食を求めて街に出た。裸電球の灯る薄暗いカフェ(?)で憩う人々の姿が柵越しに見えた。入口は…と探している時だった。背後に重苦しい妙な空気を感じて振り返ると、自動小銃を構えた2人の若者が立っていた。暗がりの出来事だけに全身から血の気が引いた。何かを語りかけるがさっぱり解らない。食堂を探していることだけを懸命に訴えた。一緒について来いという仕草にほっとした。

カフェと早合点したところはコマンドの宿舎だった。とっさに脳裏を過ったのは「ハイジャックの女王」といわれたライラ ハリドであり、日本赤軍のテルアビブ事件などの血なまぐさいことであった。日本人にとってのコマンドは胆略的にゲリラの意味が強い。ところが、アラブ人が敵として戦う相手は、ユダヤ人の中の「シオニスト」でアラブに捧げるための聖なる戦い、ジハードであるからゲリラではなくフェダイーン、聖戦で命をなげうつ殉教者と呼ぶのだという。コマンドのお蔭でゴマのついた棒状の硬いパン、チーズとスープを買い込みホテルに戻った。



灌漑用水車 ノリア

翌日、ノリアと呼ばれる大きな水車を見に行ったら。その帰り、新旧市街の境の公園に出た。公園に面してコマンドの宿舎があり、入口の衛兵が何と昨夜の彼だった。銃弾、手榴弾とナイフを差し込んだチョッキに自動小銃と見るからに勇ましい出で立ちだ。握り合った手もごつい。でも、顔にはまだあどけなさが残る20歳そこそこの若者だった。正面入口前のパン屋で待てという。昼食のパンをパクついていると、先ほどのコマンドが入ってきた。店の主人と二言三言話し込んで、目くばせしながら出て行った。

支払いの段階になった時、既に支払い済みだという。昨夜の道案内に次いで昼食をご馳走になった。店の主人の顔に笑みはなく、押し黙ったままであった。水車の前で会した農民たちのコマンドへの反応も冷めていた。どうも、彼らは地元民から遊離した存在のように思えた。

ヨルダン (ヨルダン ハシミテ王国)

ヨルダンの名称は、国土の西を流れるヨルダン川の名に由来する。マホメットの従弟アリーとマホメットの娘ファテマ夫妻にさかのぼるハーシム家出身の国王が世襲統治する王国である。人口は、2000年の約480万人であったが、2016年には970万人を突破と2倍以上となり、世界屈指の人口増加国である。原因は難民によるもので、国民の半数以上が中東戦争でイスラエルによって追い出されたパレスチナ難民とその子孫で、その数は324万人(2009)にのぼる。2015年には

ガザ紛争などにより、新たにパレスチナ人を中心に 37 万人が流入してきた。さらに、2013 年からは隣国シリアの内戦から逃れてきた人々が 130 万人に達した。

国境はイスラエル、サウジアラビア、イラク、シリアと、中東の強国に囲まれており、中東情勢の安定がヨルダン国内の安定に直結している。また、国内では、人口の半数以上を占める難民が、国家成立の礎になっているハーシム家と無関係なことが大きな不安要素となっている。

産業の中心は農業で、果樹栽培や牧畜業中心の第一次産業が 5.8%、リン鉱石と天然ガスなどの鉱工業の第二次産業が 29.1%、そして経済の主力は観光業などのサービス部門の第三次産業が 65.0% (2017) を占めている。さらに、約 60 万人ともいわれる海外で働く人々の送金が国際収支を支えている。中東に位置しているが石油は産出しない。失業率は 18.4% (2018) だが、15 歳から 19 歳は 47.7%、20 歳から 24 歳までは 37.6%と若年層の失業率が深刻な状況である。

<アンマン>

かれこれ 30 年近く前になってしまったが、アテネでヨルダンのアンマン行き航空券を買おうとしたら、ヨルダンもアンマンも通じず苦労した(*)。日本の地図帳に記載されている国名、地名で日本限定が結構あることを知った。



クション渦巻いていた。

坂道を登りツーリストオフィスに向かったが、大地と同色の建物がびっしりと傾斜地に張り付いていた。登るにつれて街はきれいになってきた。ローマ劇場前のような喧騒は無くなったが、庶民の生活上の匂いもなくなった。至る所に各国の大使館があり、お国柄を示す門構えと建物が並んでいた。折り重なった歴史と、多彩な風土を売

りに観光に力を入れている国だけにオフィスの居心地は上々だった。その足で近くの通称「ヨルダンホテル」に向かった。同国最高級ホテルだけに高台の一等地に建っていた。ドアマンは、かつて中東、アフリカ、ヨーロッパを席卷したマホメット軍団の服装そのものだった。ここの目的は、ホテルに入っているツアーデスクを介して現地発着のペトラツアー申込である。宿泊者でなくとも利用できるし、高級ホテル故の信用と安心を得られるのが有難い。

アンマン市街地、ローマ劇場跡前の安宿に荷を下ろした。アンマンは幾つもの丘に囲まれた窪地で、その中心がダウントウンであった。谷間と高台を組み合わせた立体感のある街だった。周りの丘に住む人々が集まってくるスーク（市場）があり、アラブ社会特有の賑わいと行き交う車のクラ

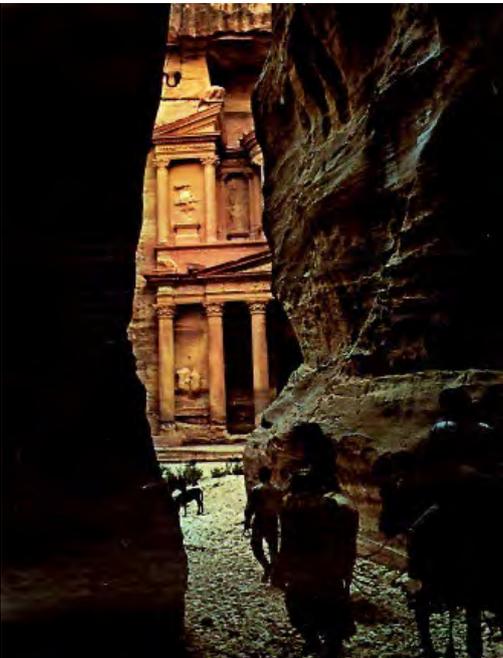


市街の至る所で遺跡が見られる

(*) 国名ではドイツの Germany やギリシャの Greece は知られているが、オランダ Netherlands (ネザーランド)、ベルギー Belgium (ベルジアウム)、ヨルダン Jordan (ジョールダン)、ウクライナ Ukraine (ユークレイン) など。都市名では北京の Beijing は知られているが、ヨルダンの首都アンマン Amman (アマン)、オーストリアの首都ウィーン Vienne (ヴィエネ)、チェコ首都プラハ Prague (プラーグ)、スイス西端の都市ジュネーブ Geneva (ジェニーバ)、ドイツ南部の都市ミュンヘンは Munich (ミュニク) などなど英語読みになると解らなくなる。

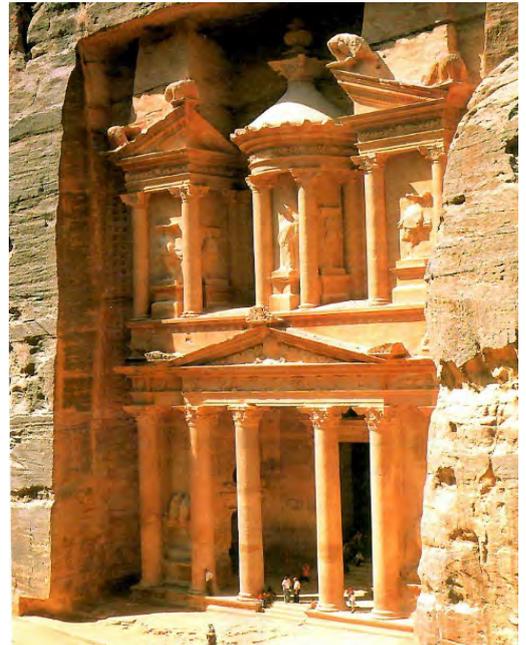
<赤い地底都市 — ペトラ>

中東最大の遺跡と言われるペトラのアンマン発着ツアーに参加した。アカバに伸びるハイウェイから遊牧民のベドウィン、ラクダが頻繁に望まれた。白っぽい、石ころだらけの荒野に、たまにぼつりと集落が現れる。水気を含んだ土など何処にもないが、目を凝らすと枯草に同化して小麦が栽培されていた。



ハイウェイから右折した途端、道路幅は狭まり、右に左にカーブする下り坂になった。横縞のはっきりした黒い崖を回り込んだところで車は止まった。遺跡の岩窟をそのまま利用したレストハウスがあった。ここから先は、曲りくねった岩の回廊だった。両側の岩壁はくねりながら上へ上へと伸び、上に行くほど狭くなっている峡谷だ。岩肌が赤、褐色、紫、灰色の層をなしている。

峡谷を抜けると、突如として正面に見慣れない建物が立ちはだかっていた。むき出しの朱色の岩を彫り抜いた列柱と彫像の「エル カネス フィラウン」(ファラオの宝庫)である。二階建ての内部には、大きな四角形の広間が掘りぬかれているだけで何もなかった。地球の裏の底から突如として現れるバラ色の壮麗な遺跡にやや南寄りから射す陽光が、不可解な遺跡に生命を与えていた。



さらに進むと、視界が開けてきた。周囲の岩肌は何処も朱色を帯びており、神秘さを通り越した不気味さを漂わせていた。そして、視界に入る全てが遺跡だった。観光に解放されているのは1%に過ぎず、発掘は1/3にも及ばないとパンフレットに記されていた。ペトラは、BC. 312年に建国されたナバテア王国の首都だった。メソポタミア、エジプト、ギリシャ、インダスの古代文明を結ぶ要衝の地として、沙漠を移動する隊商の中継基地として、さらにはアラビア付近の貿易、香料、絹、香辛料を独占して繁栄していたとされている。

＜胃袋のしわが一斉に動き出した＞ － ラマダン明けの風景

18:40、夕食を求めて街に出た。路上の一膳飯屋はじめ、大きな食堂もどこもかしこも順番待ちの混みようだった。ウェーターは駒ネズミのように動き回っている。ご馳走を前にした客は、とろんとした生気のない目つきで、押し黙ったまま座っている。みんなラマダン明けの食事、イフタールを待っていた。ラマダンとはイスラム歴の9月で、白い糸と黒い糸の違いが判るような明るさになったら断食をはじめ、違いが判らなくなるまで続けるのだという。食欲という人間の基本的な欲望に打ち勝つことで得られる自制心、みんな平等に我慢することからの連帯感や思いやりの心を呼び覚ますのだという。

突然、地上を揺るがす「ドーン」が響き渡った。同時に、スピーカーからはガラス窓を震わすような音量の放送が流れてきた。もう、みんなは一斉に食べ始めている。まさに早食い競争だ。パンをちぎる手、鶏をむしる手、水のコップに伸びる手、食べ物を口に運ぶ手を驚きの目で只々見入ってしまった。テーブルに飛び散る量は半端ではない、水を飲む音、鶏の骨と食器がぶつかる音もまた凄い。腹に入る量に比例して、話し声と共に笑みがこぼれだした。「ドーン」の前のうつろな目ではなくなった。もさぼり食っていた時の険しい目つきもでもなくなった。

イスラム教は沙漠の宗教である。酷熱と不毛の地の中で生まれた一神教である。1つの神とは永遠に変わらない神のことであり、常に存在し、全てのものを支配している神のことである。こんなところから統一性、一様性が際立つ宗教、イスラム教が生まれたのだろうか。イスラム教徒は、1日5回ほぼ同時刻にサラート、礼拝を行う。毎週金曜日には地域ごとにほぼ同じ時刻に、同じ所作で礼拝をおこなう。そして、礼拝の全ては同じ方角を向いて行われる。さらには、毎年一定時期に全世界からモスリムの空間的移動、ハッジ、巡礼が行われる。これらの集団的画一性が、神を媒介とした強烈な一体感、同朋意識を培っているのだろうか。

トルコ（トルコ共和国）

トルコは黒海、エーゲ海、地中海に囲まれたアナトリア高原の国である。かつてヒッタイト帝国、古代ギリシャ、ローマ、ビザンチン帝国、オスマン帝国などが興亡の舞台となった。トルコが近代国家として誕生したのは第一次世界大戦後である。1923年に成立したトルコ共和国は、初代大統領ケマル アタチュルクによる「トルコ革命」によって、他のイスラム世界と異なる独自の国家路線を歩みだした。具体的には、政教分離を断行、アラビア文字に替わってアルファベットに、一夫多妻制禁止、1934年には女性の参政権を実現させたアタチュルクは「建国の父」と称されている。

国民のほとんどがイスラム教徒だが、国内には数多くのキリスト教と縁の深い遺跡、史跡が数多く残されている。イスタンブールの世界遺産「アヤソフィア」は、東ローマ帝国時代にキリスト教の大聖堂として建築されたが、後になってイスラム教の尖塔が増築されてモスクとなった。世界遺産のカッパドキアは、初期キリスト教の教会や住居として使われていた。聖母マリアが晩年を過ごしたとされるエフェス遺跡近くに修道院跡がある。旧約聖書に出てくる「ノアの方舟」が漂着したとされるアララット山がトルコの東端に聳えている。

トルコが位置するアナトリア半島は、ヨーロッパ、アジア、ロシア、アフリカに近い地理的特性か

ら幾世代にもわたり混血を繰り返してきた。目や髪の色などは実に多様で、母親と子どもで異なることも珍しくない。民族に関する正確な調査は長年実施されていないが、国民はすべてトルコ語を母語とする「トルコ人」であるという建前を取っている。少数民族として非イスラム教のギリシャ人、アルメニア人、ユダヤ人の3民族であると定義しているが、共和国成立以前から東部を中心にクルド人をはじめ多くの少数民族が居住している。

産業は、近代化が進められた工業と商業、それに伝統的な農業からなっている。農業従事者が就業者の40%を占めており、ヘーゼルナッツ、イチジク、サクランボ生産は世界1、小麦、砂糖、豆類など多くの農産物の生産は世界有数の農業国である。しかし、地主制が温存されており近代化には程遠い。工業は軽工業が中心で、繊維や衣類の輸出大国である。また、石炭はじめ鉱物資源に恵まれ、マグネシウムをはじめ、アンチモン、金、鉄、銅、鉛、ボーキサイトを産出する。

トルコ料理は東西の食文化を融合させた多彩な素材、味、調理法を持つことから中華料理、フランス料理と並んで世界三大料理の1つと称されることが多い。イスラム教国ではあるが飲酒は比較的自由で、レーズンからつくられる蒸留酒に、アニスで香りづけされたラクが知られている。透明だが水を入れると白く濁ることから「ライオンのミルク」との呼び名がある。

コーヒー粉末と砂糖を入れた容器、ジャズヴェを火にかけて煮出すトルココーヒーはユネスコの無形文化遺産に登録されているが、2段重ねのポットで煎じる紅茶、チャイの方が親しまれていた。また、ヨーグルトを冷たい水で薄めてよくかき混ぜ、薄塩味のアイラン (ayran) という冷たい飲みものも大人気である。

トルコが国際社会の注目を集めていることの 하나가 EU、欧州連合への加盟である。イスラム社会で唯一 NATO、北大西洋条約機構に加盟し、欧米諸国との関係が深いことから強い関心を示してきた。1987年に EC 加盟申請、2005年からは EU への加盟交渉が始まっているが、クルド人問題がネックになり具体的な加盟の見通しはたっていない。

<トルコと日本の関係>

日本との関係を見ると、大変な親日国として知られている。その裏には両国の間に様々な歴史的な出来事があった。1890年

(m23)、軍艦エルトゥールル遭難事件が親日の始まりと言われている。さらに、日露戦争での「日本海海戦」での圧倒的な勝利が、ロシアの脅威にさらされていたトルコに深い感銘を与えたとされている。

勝利のきっかけとなったのが明治

維新ということで、トルコ近代化のスタートとされる「トルコ革命」はこれに倣って断行されたといわれている。そして、イラン イラク戦争中の1985年、イラクの空爆を目の前にイランの首都テヘランに取り残された日本人215名をトルコ航空でタイムリミット1時間15分前に奇跡的に救出という出来事につながった。

トルコの国旗は赤地に星と三日月が白く染め抜かれている。日本は白地に赤い太陽である。アジ



アの両端の国で示し合せたような図柄になっているのも興味深い。

<人生観は味覚を左右する> — トルコ料理

トルコ料理は世界三大料理の 1 つに数えられることが多い。その特色はアジアに起源をもつ遊牧民から受け継いだ料理法と地中海の料理法が融合し、宮廷で洗練されたからだという。1 つの民族が長い歴史を通して伝え続けてきた料理なら必ず美味しい。

トルコ料理の基本はオリーブオイルと羊肉である。食材で多用されるのがトマトとナスである。ひき肉やコメを詰めたピーマンをトマトペーストで煮込んだドルマ、肉団子とジャガイモのトマト煮込みのキョフテ、パンにドネルケバブを重ね、ヨーグルトソースとトマトソースをかけたイシケンデルケバブ、賽の目切りのトマト、キュウリ、玉ねぎなどが合わさった定番のチョバンサラダなどなどである。そして、主食はパンで噛めば噛むほど美味しい固めのコッペパンである。籠に盛られており食べ放題だから有難い。飲み物は塩が少し入った飲むヨーグルトでケバブ類との相性がぴったりのアイランなどなどが思い浮かんでくる。

決して豊かには見えない人々でもロカント、大衆食堂では食事を楽しむ心の豊かさを感じとれる。トルコに限ったことではないが、その土地その土地に歴史と風土に支えられた食生活がある。従ってその土地の人々と同じような生活を送ってこそ本物の美味しさを感じられるのではないか。要は本人の旅の仕方や心構え、その土地での人々との接し方によって、味覚も左右される気がする。

<ビザンティウム、コンスタンティノープル、そしてイスタンブール>

イスタンブールは言い伝えによると太陽神アポロンによって位置が決められたという。古くは紀元前 2,000 年前半、ヒッタイト人に始まる。その後ローマ帝国、ビザンチン、ラテン帝国、オスマン帝国と 4 つの帝国の首都であった。その間、諸々の文化が展開し積み重ねながらビザンティウム、コンスタンティノープルそしてイスタンブールと名称を変えた。ギリシャのビザス王による首都建設し、王の名に由来するビザンティウム、王都を意味した。その後、アレキサンダー大王による征服などを経て、コンスタンチン大帝によってローマ帝国東半分の政治的中心と定められ、コンスタンチンの都市としてコンスタンティノープルに変わる。そして、14 世紀以来ローマを圧迫し続けてきたオスマントルコが、1453 年にコンスタンティノープルを陥れ、イスラム人が多いの意味を持つイスタンブールと改めた。

アタチュルクの指導による革命で新生トルコ共和国が誕生し、首都はアンカラに移され、イスタンブールの首都は終わる。その間実に 1,600 年間にわたる史上最長の都である。この歴史を知るとき、トルコ人の誇り高さ民族性に素直にうなずけるのである。

<トロイ> — 神々が遊んだ王城は歴史の重さに潰されていた

バスでトロイに向かった。ギリシャの詩人ホメロスの「イリアス」に詠われたトロイ戦争の舞台である。なんとも茫漠とした眺めである。カラカラに干上がった枯草の中に石壁と瓦礫と折れた石柱が転がっていた。紀元前 300 年から 200 年頃までに造られた 9 つの都市の廃墟である。ポセイドンやオリンポスの神々が登場する舞台にしては余りにも粗末すぎる。複雑に積み重なった都市を歴史という重みで押しつぶした光景である。遺構図を開いてみてもどうにもならない。チャナカレ

から一緒だったドイツ人は困惑しきった様子で遺構図を眺めながら地面に座り込んで動かない。アメリカ人は水を飲み飲みうなずきつつ先行している。



トロイの歴史を推理小説のごとく解き明かせる人が居るのかと考え込んでしまった。イリアスには美人コンテストやそれにまつわる賄賂、恋物語などいかにも人間臭いことが綴られている。また、10万のギリシャ軍勢がダーダネルス海峡に押し寄せ戦争終結まで10年を要していると記されている。

ところで、空想と思われていた物語は、19世紀入ってドイツ人シュリーマンによって発掘され、トロイ王城が実証された。彼の執念に

よって3,000年ぶりに姿を現したトロイ至宝は、第二次世界大戦時のドイツ爆撃により、わずか30年で再びこの世から消えてしまった。しかも、今度は永遠に。今、トロイ遺跡に直接戦争に関わったドイツ人とアメリカ人と日本人が、頭を抱えて困惑しきっているのが何とも奇妙であった。

<白さにくしゃみが出る綿の城> - パムカレ

すし詰め状態のミニバスの車窓から見え隠れする景色に一瞬目を疑った。強い日差しに輝く雪壁があった。純白に輝く眩しさは雪山以外の何ものでもなかった。しかし、近づくにつれて水着姿で遊ぶ姿が見えてきた。パムカレは幻想的な白銀の世界であった。

パムカレは1094年、アナトリアに進出してきたルームセルジュークが、この地に城を築いて以来の地名だという。パムクは綿、カーレは城の意味だという。

夕方を待ってパムカレの下から上へと探索に出た。白さに目が眩んだ。目への刺激でくしゃみが出た。白く輝く灰華地形は雛段になって90mも連なっていた。近づくにつれて階段状に重なりあう白いテラスが突然凍りついたように見える。よく見ると細やかな横縞が均等に走っていた。この不思議な白岩石は、温泉水がつくりあげたものだ。最上部から湧き出た温泉水が下に横に流れるうちに蒸発し、冷え、水に含まれていた鉱物質が沈殿したものだという。



登るにつれて幅数十メートル皿状のテラスが上下左右に連なり、ことごとく温泉水に満たされていた。そして、老若男女の遊び場となっていた。ここの温泉はいろんな病に効用があるらしくローマ人によって温泉町が造られ、湯治客で賑わったとも聞いた。陽はすっかり傾いたが、湯と戯れる人々の声が響き渡っていた。

登ってきた急崖をたどって宿に向かったが、熟しきったイチジクの香りが漂い、白い大地を背景にピンクの夾竹桃が咲き乱れていた。

<アジアハイウェイ>

イラン イラク戦争中の 1982 年夏、イスタンブールとテヘラン結ぶ国際バスは、東方を目指して黄昏のアジアハイウェイを走り出した。2 人のドライバーが交代しながら夜通し走り続けた。

アナトリアは広い。遙か彼方に山並みの見える大地は大ききうねり波打ち、見渡す限り小麦畑が続いていた。所々で大きな鎌を振りふり刈り取り中だ。たまに脱穀機もあったがほとんどは手仕事だ。日本に貧しい農家の代名詞でもある「三段百姓」という言葉を思い出した。機械や畜力に頼らず人力で耕せる限界だと聞いたことを思い出す。小麦生産量が世界 7 位と農民の豊かさは比例していない。

2 日目、シバスを過ぎたところでバスが故障した。丁度、チグリス川の上流部だ。昨夜、車中泊だったこともあり、みんな外に出て背伸び、屈伸、そしてチグリス川への石投げに興じた。夕方、宿泊地であるクルド人の街、エルズルムに着いた。アナトリア高原東端、山々が迫る標高 2,000m の辺境の街であった。この地域はペルシャ、コーカサス、西アナトリアを結ぶ通商路となっていたため、昔から多くの帝国の支配を受けてきた。郊外に要塞が見えたが、東端の要地としての役割を果たした名残だろうか。すり減った石畳の道の両側には土造りの家が軒を寄せ合っていた。街は、東西の



ジェムフリエット通りと南北のメンデレス チャド通りが走っている。この 2 本の道路の交差点から半径 500m くらいの地域が街の中心部であった。

内陸部のエルズルムの年間降水量は 300~400mm 位と少ない。しかも、降水量は春先に多く、7~9 月は乾期にあたり乾燥している。トルコで最も飲まれているチャイは、日本のお茶以上だ。ど

このチャイハネも男性同士でチャイを飲みながら世間話をしている姿が見られた。みんな逞しい体格で黒く太い眉、地味な服装が目立つ。これまで見慣れてきたトルコ人とは明らかに違う。ここはクルド人の街だ。

翌日、国境の街、ドグバヤジェットに向かった。アジアハイウェイは、かつてペルシャとの隊商貿易のメインルートだった。坂道を登り切ったときだった。そそり立つ白い山が飛び込んできた。旧約聖書創世記に出てくる伝説の山、5,165m のアララト山だ。乾き切った荒野の彼方にそびえる孤高の山であった。「大アルメニアの中央部に高い孤立した山があって・・・」と、マルコポーロもこの山に触れている。彼もまたこの付近に宿をとり東への旅をつづけたのだろうか。

ドグバヤジェットで長い休憩をとった。国境まで 35 km である。大型のトラックが疾走するアジアハイウェイと並走する旧道があった。長い歴史の感じ取れる建物に囲まれ、ロバが荷を運んでいた。南に回り込むと、アララト山は富士山の様に裾野を伸ばし天に向かって聳えていた。

<悲劇のクルド民族>

クルド民族の人口は 2,500 万~3,000 万人と言われている。中東ではアラブ人、トルコ人、イラン人の次に多く、単一民族で国を作れる大民族である。しかし、トルコ、イラク北部、イラン西北部、シリア北東部など複数国に分布しているため、どこでも少数民族となり自分たちの国家を持たない世界最大の悲劇の民族と言われている。

彼らは7世紀にアラブに、11世紀にはモンゴルとセルジュークトルコに征服された。その後オスマントルコの勢力下に入るが、1つの国、クルディスタン、クルド人の土地に居住していた。しかし、第一次世界大戦後オスマン帝国が敗れ、サイクス ピコ協定に基づきフランスとイギリスによって引かれた身勝手な国境線により、トルコ、イラク、イラン、シリア、アルメニアの5つの国に分けられてしまう。その結果、どこの国でも少数民族になってしまった。

その後、自衛のための争い、孤立した民族同士の争い、民族独立の戦い、さらには独立運動が各国の代理戦争に利用されるなど争いごとが続発した。20世紀に入ってからだけでもトルコで3回、イランで1回、イラクで4回の反乱、武力抗争を起こしている。いずれの争いも不条理に分断された民族の独立国家を目指してのものだ。しかし、周辺各国は頑として拒否の立場を貫いている。その理由は、彼らが住むイラク北部にはキルクーク油田があり、トルコ南東部はチグリスユウフラデス川の水源となっている。貴重な「油と水」をクルド民族に支配されることを心配しているのである。苦難の歴史は今もなお続いている。宗教はイスラム教で、生業は牧畜が中心だったが、近年トルコなどを中心に都市へ流入し、都市生活を送る割合も相当数存在している。

イエメン（イエメン共和国）

国名はアラビア語で「右」を意味するヤミンに由来する。聖地メッカのカーバ神殿に向かって立つとイエメンは右側にあたる。古代は交易の中心地として栄え、ギリシャ ローマ時代には「幸福のアラビア」と呼ばれていた。首都のサヌアの旧市街は現存する最古の都市とされ、世界遺産になっている。

いくつかの王国の興亡があり、16世紀にはオスマントルコ、19世紀初頭にはエジプト支配下に置かれた。その後、南イエメンはイギリスの植民地となる。第一次世界大戦後にイエメン王国として独立する。しかし、戦争やクーデターで王国は崩壊し、イエメンアラブ共和国、北イエメンが成立する。1990年、イエメン人民民主共和国、南イエメンが合併し、現在のイエメン共和国が成立した。その後も内戦、アラブの春に触発された騒乱、クーデター、内戦が続き、未だに安定にはほど遠い。

国土の多くは沙漠で農業は振るわないが、コーヒー豆はモカコーヒーとして世界中から親しまれている。就労者の多くは隣国サウジアラビアへの出稼ぎ生計を立てているのが現状で、サウジアラビアのお金がそのまま使用されていた。成人男性は腰帯にジャンビーヤと呼ばれる短剣を差している。これは実用面より部族や家柄などを表しているという。イスラム教で禁じられているアルコールに代わりにカートと呼ばれる麻薬の一種の葉を噛む姿が至るところで見られた。

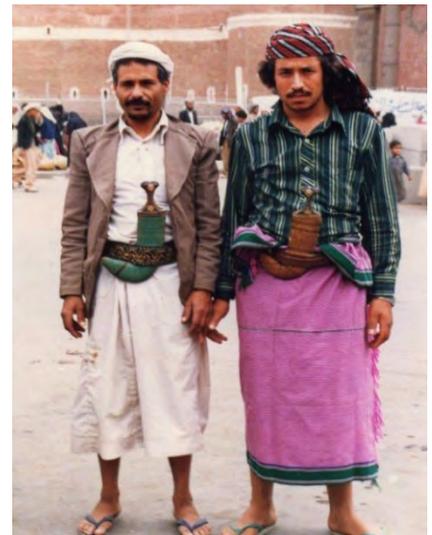
<ジャンビーヤとカートの街> - サヌア

サヌアの詳しい歴史は解らないが、大洪水の後ノアによって建てられというから、かなり長い歴史があるのだろう。サヌアのシンボルが「バベル ヤーマン」、イエメンの門である。空港で会したドイツ人の紹介で門の真ん前に宿をとった。

宿から見下ろす門は息づいていた。一息ごとに人間が吐き出され、吸い込まれていく。完全な男社会で、多くはフータと呼ばれる腰巻スタイルだが、貫頭衣に背広を羽織るもの、ズボンにシャツ姿と様々だ。足元は申し合わせたようにゴム草履かサンダル履きだ。そして、体の正面に、これ見よがしに差し込んだ短剣、ジャンビーヤ(*)が何とも異様であった。



イエメンの門



ジャンビーヤ姿

17時過ぎ、宿の一室が賑わいだした。カーペットの敷き詰められた室内は、多くの人々が腰を下ろしたり、寝そべったりと思い思いの格好で集まっていた。みんな手にカートの小枝を持ち新芽、若葉を指先で確かめながら口に運び、もぐもぐと動かしていた。噛んだ葉は飲み込まずに口内に溜めているので、瘤取り爺のような格好だ。カートは微弱な覚醒作用のある麻薬である。彼らの言葉を借りると眠気払い、疲れを感じなくなり、力強くなるという。カートの歴史は6世紀中頃エチオピア伝わってきたとされている。カートの葉を食べ気持ち良さそうにうすくまる羊を見て、自分で確かめた商人によってもたらされたという。

イエメン人にとっては社交生活上なくてはならないものらしく、街角や室内に集まり、噛みながら和やかに談笑しているのを見かけた。お楽しみのところに顔を出した手前、お前もやらないかの誘いを断り切れずに口にしてみた。青臭みとともに苦味、渋味が口いっぱい広がったところでギブアップした。彼らによるとこの段階を通り越すと微妙な渋みを伴った甘みを感じるようになり、脳や足に届くと多幸感あふれる状態になるのだという。日本では広義の麻薬には含まれているが効果、毒性が非常に低いため規制の対象とはなっていない。

(*) 男のプライドのシンボルともいえるジャンビーヤ姿 腰にナイフをさした男たちが歩く姿を見ていると、まるで過去にタイムスリップしたような気になった。実用性なく、刃は研がれていない。街には販売店があり、手の込んだベルトやホルダーなど芸術的ともいえるものを並べている

<独り歩きの地名 モカ>

イエメン行きを思い立った時、一番先に思い浮かんだ地名が港町アデンとモカだった。タイズの宿でモカへの行き方を聞くと、何しに行くのかと聞き返された。日本を出る前目を通した資料によると、「迫りくる沙漠に手を焼き、港町としてにぎわった面影はない」とあったが、コーヒーの話になると必ず耳にする地名である。

タイズから相乗りタクシーでモカを目指した。タイズは、かつてのイエメン王国の首都で、標高 1,400m である。タクシーはタイヤをきしませながら坂道を降った。時折、谷が現れるが水は流れていない。高度が下がるにつれて室内気温が上昇してきた。窓を締め切って走っているが、ベンチレーターから吹き込んでくる風はまるで熱風だった。

モカに入ると紅海を背にした白いモスクが見えてきた。海は遠浅で、子供たちの格好の遊び場となっていた。みんなの肌が黒い。台地に住むアラブ人とは明らかに異なる。沖に防波堤があり 1 隻の大型貨物船が停泊していた。港のレンガ造りの建物が半分砂に埋もれている。小型木造船が 20 隻ばかり砂地に引き上げられ、カツオの頭を切り落とし作業中で強烈な臭気が漂っていた。浜辺には木製のベッドがいくつも並んでいた。端に夜具らしきものが丸められているから、夜は「ミリオンスターホテル」に早変わりするのだろう。

モカコーヒーの産地はサヌアやタイズを乗せるマナーハの高原地帯である。それがこのモカ港から世界に運ばれているうちにモカコーヒーと呼ばれるようになった。モカは 18 世紀からコーヒーを積み出し、最盛期には人口 60,000 人を数えたというが、今は 1/10 を切っているという。今日のモカコーヒーは北方の港町、ホデイダから船積みされているという。そして、コーヒーそのものがカートに押されて減少の一途をたどり、主産地はエチオピアに取って代わられたという。このままではモカコーヒーのモカとして、再び活況を取り戻すことはなく、地名だけが独り歩きする運命に思えた。

<アラブの故郷> — イブとジブラ

相乗りタクシーでタイズからイブ向かった。高度を増すにつれて緑が濃くなってきた。段々畑は一度で視野に入らない程高く、幅広い。これがことごとく石積みで支えられていた。イブの別名は「緑の谷の首都」だけに、緑滴るところだった。アラブ中でもアラビア半島となれば乾燥地を思い浮べるが、ここだけは例外である。そのためかイエメン人は自分たちこそがアラブの中のアラブ、アラブ民族発祥の地だと自負している。ところで、アラブの意味だが、アッシリア バビロンの碑文によると、アラビア半島、シリアの沙漠に住む遊牧民、ベドウィンを指している。その後、時代や地域により変化し、今日では 22 ヶ国に及んでいる。他の民族からアラブと呼ばれる以前から彼らは存在していた。その人たちの故郷は何処なのだろうか。アラビア半島で人間の生存に適したところ、すなわち年間降水量 1,000 mm 以上あり、食料生産の可能なところとなるとイエメンと考えられなくもない。イブの緑は穀物はじめ野菜、果物などなどであった。

タクシーを乗り継ぎジブラに向かった。未舗装の曲がりくねった道が畑の間に伸びていた。程なくして、石やレンガ造りの建物が緑の斜面に這いつくばるジブラが見えてきた。どの家の窓も白く隈取りされ、色とりどりの美しいステンドグラスで飾られていた。

ジブラは白いミナレット、尖塔とクポラ、丸屋根の目立つ 2 つのモスクを中心にした山間の街で

あった。道路はいつの間にか狭くなり、石畳の小路になり、モスクに吸い込まれていた。

モスク内にはカーペットが無造作に敷かれていた。モスクの雰囲気は、日本の仏教寺院とは大違
いだ。人々の日常生活に溶け込んだ自然さとおおらかさがある。カーペットに額をこすりつけるよ
うに祈る人の傍で手枕のまま眠りこけている人もいる。異教徒の私を案内してくれる人もいる。一見、無
秩序にも見えるが、日本人が考えがちな堅苦しさは微塵もなかった。



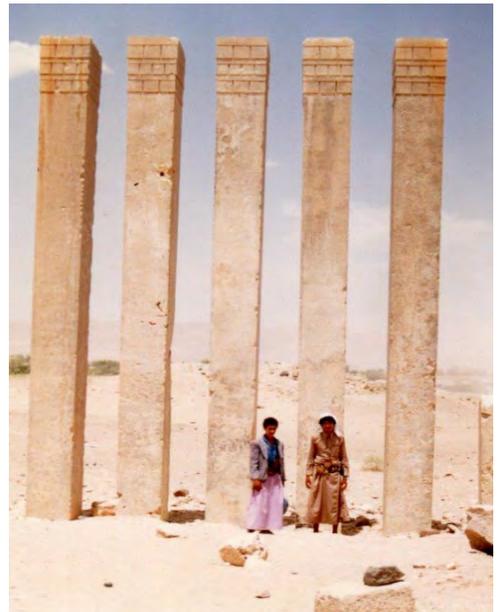
＜シバの女王の国＞ マアリブ

幹線道路逸れるとチェックポイントがあり、身分証明書と通行ビザの提示を求められた。バスを一
斉に降りたイエメン人たちは武器を持って再び乗り込んできた。イエメンの田舎ではみんな護身用
の武器を携行している。市街地に入る時は、一時預かりとなるのだという。

いざ戦場へを思わず勇ましい姿と丸腰の客を乗せたバスはまた走り出した。道路は礫沙漠の中に
伸びていた。乗り合いバスに冷房なんてあるはずがない。バ
スは窓を締め切ったまま走る。汗が体を流れだした。変化の
ない景色を眺めていると遙か彼方に木々が見える。それが水
面に映っている。よく見ると陽炎でゆらゆら揺れている。ひ
さしぶりに見る蜃気楼だった。

礫原のかなたに集落が見えてきた。バスは大通りを避けて
バラック建ての旧マアリブで止まった。ここからはタクシー
のチャーターだ。その前に料金の交渉がある。サダで同宿だ
ったフランス人は 100 リアル、スイス人は 50 リアル支払
ったという。覚悟して臨んだが、バスであれこれ面倒を見て
くれたイエメン人が中に入ってくれた。2人で 100 リアル
に落ち着いた。タクシーとはいっても日本製の小型トラック
だ。助手席には当たり前のように自動小銃が置かれていた。

途中から道がなくなった。砂に残るわずかな轍を忠実にた
どった。あたり一面は荒涼とした砂沙漠に変わった。左に大きくカーブすると有刺鉄線に囲まれた



月の神殿跡

石柱が見えてきた。シバの女王が月の女神に捧げた「月の神殿」の一部だというのが、自分は「あっそうか」と納得するほかなかった。

車は砂の坂を登りだした。バルハン砂丘の内側に「女王の神殿」があった。当時の規模は1平方kmに及び、厚さ1mの壁に囲まれていたというのが今は砂の中だ。褐色に黒色砂が混じった砂原に石柱がよきによきと立っていた。顔を出している石柱は柱廊の一部だとあるが自分の理解を超えていた。肌に突き刺さる太陽光線を遮るものは何もない。ここは地球上で最も過酷な沙漠の一つと言われるルブ アル ハリの南端である。

シバ王国を支えていた全長 500mもあったといわれるダム跡を訪ねた。旧約聖書から続く遺跡だというのに半ば砂に埋もれ、放置された状態だった。大体このあたり一帯、アラビア半島南部の歴史はまだまだ神秘のベールに包まれたままで、何処も発掘には程遠い状態だった。



シバ王国を支えたダム跡